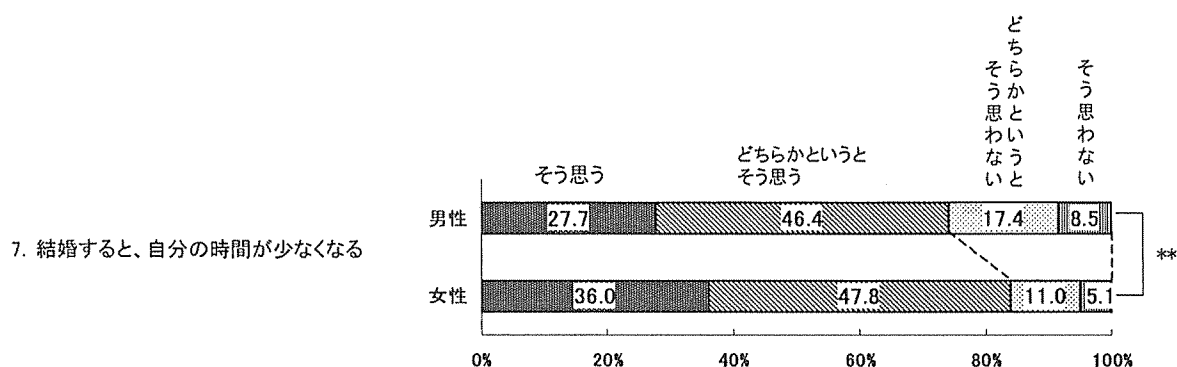


図表 2.24b 男女別にみた結婚によって得るもの・失うものに対する考え(Q3)(続き)



男性は女性よりも、「結婚すると、安らぎを得られる」、「結婚すれば、幸せになれる」、「結婚したら、家庭のために、自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ」、「結婚すると、自由にお金が使えない」と感じていた。一方、女性は、「結婚すると、自分の時間が少なくなる」と感じていた。

男性の方が、女性よりも、結婚は、お金を含め自分を犠牲にするものであると感じているが、同時に、安らぎや幸せという結婚によるメリットも強く認識していた。女性は、結婚することにより時間を失うとデメリット感じているが、男性ほどは結婚にともなうメリットを認識していなかった。

2. 結婚に対する意識の構造

(1) 因子分析による結婚に対する意識の構造の検討

結婚に対する意識の構造を検討するため、結婚・結婚によって得られるもの・失うものに対する考えのすべてをあわせた全項目に対して、因子分析（主成分分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値1以上の因子について因子数を変化させながらバリマックス回転を行った結果、解釈可能性から、4因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第1因子から順に、21.1%、11.1%、9.3%、8.4%であり、累積寄与率は49.8%であった。因子分析の結果を、図表 2.25 に示す。

第1因子は、「結婚するのは、当たり前のことと思う」、「生涯独身で過ごすというのは好ましい生き方ではない」などの項目の負荷量が高かったことから、『伝統的結婚観』を表す因子であると解釈された。第2因子は、「結婚すると、社会的信用が得られる」、「結婚すると、安らぎを得られる」などの項目の負荷量が高かったことから、『結婚のメリット』を表す因子と解釈された。第3因子は、「結婚すると、自由にお金が使えない」、「結婚すると、自分の時間が少なくなる」などの項目の負荷量が高かったことから、『結婚による拘束感』を表す因子と解釈された。第4因子は、「問題のある結婚生活なら、早く解消した方がいい」、「今の世の中、結婚しなくても生きていける」などの項目の負荷量が高かったことから、『個人志向型結婚観』を表す因子と解釈された。

図表 2.25 結婚に対する意識に対する因子分析の結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	
伝統的結婚観					
Q2.1 結婚するのは、当たり前のことと思う	.82	.15	-.07	.02	
Q2.2 生涯独身で過ごすというのは、好ましい生き方ではない	.79	.10	.08	.00	
Q2.3 男性は結婚しないと、一人前とはいえない	.79	.15	-.01	.03	
Q2.7 結婚したら、子どもを持つべきだ	.74	.10	.11	-.08	
Q2.6 女性にとっての幸せは、結婚することである	.74	.25	.00	-.22	
Q2.5 一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべきだ	.56	.25	.00	-.19	
結婚のメリット					
Q3.4 結婚すれば、社会的信用が得られる	.44	.43	.08	.22	
Q3.1 結婚すると、安らぎを得られる	.16	.77	.00	-.05	
Q3.3 結婚すると、人間として成長できる	.24	.69	.05	.14	
Q3.2 結婚すれば、幸せになれる	.29	.68	-.11	-.20	
結婚による拘束感					
Q3.6 結婚すると、自由にお金が使えない	.03	.01	.80	-.09	
Q3.7 結婚すると、自分の時間が少なくなる	-.04	-.09	.77	.11	
Q3.5 結婚したら、家庭のために自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ	.32	.16	.46	-.15	
Q2.4 結婚生活に、多少の我慢は必要だ	.13	.25	.40	.20	
個人志向型結婚観					
Q2.9 問題のある結婚生活なら、早く解消した方がよい	.03	-.09	-.01	.66	
Q2.8 今の世の中、結婚しなくても生きていける	-.14	-.07	-.10	.66	
Q2.12 結婚しても、配偶者とは別に自分だけの人生の目標を持つべきである	-.22	.11	.28	.49	
Q2.11 結婚後も、夫婦は互いに異性としての魅力を持つことが大切だ	-.04	.27	.08	.41	
Q2.10 できることなら、夫婦別姓にしたい	-.37	.02	.14	.15	
	因子負荷量の2乗和	4.01	2.10	1.76	1.59
	因子の寄与率(%)	21.09	11.08	9.27	8.36

(2) 結婚に対する意識の尺度構成

因子分析の結果から、結婚に対する意識は、『伝統的結婚観』、『結婚のメリット』、『結婚による拘束感』、『個人志向型結婚観』の4側面から構成されていることが明らかになった。それぞれの側面について、 α 係数を算出したところ、 α 係数は、『伝統的結婚観』から順に、.86、.70、.54、.41であった。各因子に高く負荷する(.40以上)項目の回答を単純加算し、各尺度得点とした。いずれの尺度も、尺度得点が高いほど、結婚に対して、当該の意識が高いことを示す。なお、『個人志向型結婚観』尺度は、 α 係数が低かったため、4点から10点、11点と12点、13点と14点、15点と16点を、それぞれ1点、2点、3点、4点へと再カテゴリー化した。

各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差を図表 2.26 に示す。

図表 2.26 結婚に対する意識の各尺度得点の平均と標準偏差

尺度名	N	分布範囲	平均	標準偏差
伝統的結婚観	478	6~24	14.19	4.97
結婚のメリット	488	4~16	11.68	2.58
結婚による拘束感	490	4~16	11.89	2.19
個人志向型結婚観	486	1~4	2.88	0.94

(3) 下位側面別にみた性差と年代差の検討

各尺度得点の性差および年代差を検討するため、性(男性、女性)×年代(30代、40代、50代、60代)の2要因分散分析を行った。その結果を、図表 2.27 に示す。

『個人志向型結婚観』尺度では、有意な性差・年代差が見られなかったが、『伝統的結婚観』、『結婚のメリット』、『結婚による拘束感』の3尺度では、男性の方が女性よりも、尺

度得点が高かった。また、『伝統的結婚観』尺度では、60代の方が、その他の年代よりも、『結婚による拘束感』尺度では、30代の方が50代よりも尺度得点が高かった。

以上より、男性は女性よりも、結婚を当然とする意識をもち、また結婚によるメリットを感じるとともに、拘束感も感じていた。また、60代は結婚を当然とする保守的な考え方を持っており、若い30代は、結婚生活による拘束感を強く感じていた。

図表 2.27 結婚に対する意識の各尺度得点に対する分散分析の結果

尺度名		30代	40代	50代	60代	検定	Scheffe法	
伝統的結婚観	男性	平均	16.18	14.47	15.34	16.44	性 *** 年代 *** 交互作用 ns	男>女 60代>30代,40代,50代
		標準偏差	4.56	5.16	4.85	4.24		
		N	49	53	59	55		
	女性	平均	12.21	11.71	12.52	15.77		
		標準偏差	4.48	4.76	4.78	4.51		
		N	73	56	71	62		
結婚のメリット	男性	平均	12.16	12.12	12.05	12.02	性 ** 年代 ns 交互作用 ns	男>女
		標準偏差	2.34	2.80	2.69	2.46		
		N	49	57	60	56		
	女性	平均	11.63	11.14	10.85	11.75		
		標準偏差	2.31	2.63	2.82	2.38		
		N	73	57	72	64		
結婚による拘束感	男性	平均	13.25	12.16	11.35	11.87	性 * 年代 *** 交互作用 ns	男>女 30代>50代
		標準偏差	1.82	2.07	2.41	2.03		
		N	49	57	60	55		
	女性	平均	12.08	11.81	11.25	11.76		
		標準偏差	2.26	1.96	2.25	2.07		
		N	73	57	76	63		
個人志向型結婚観	男性	平均	2.88	2.83	2.80	2.84	性 ns 年代 ns 交互作用 ns	
		標準偏差	1.03	1.00	0.88	0.86		
		N	49	57	60	55		
	女性	平均	2.89	3.00	2.85	2.94		
		標準偏差	0.98	0.93	0.91	0.99		
		N	73	56	72	64		

注:*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

第4節 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との関連

結婚に対する意識のどのような側面が、離婚および離婚家庭に対する偏見意識と関連しているのかを検討するために、男女別に相関係数を算出した。男性の相関図を図表 2.28 に、女性の相関図を図表 2.29 に、それぞれ示す。

図表 2.28 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との相関(男性)

	伝統的結婚観	結婚のメリット	結婚による拘束感	個人志向型結婚観
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	.41 *** (211)	.38 *** (216)	.26 *** (215)	-.08 (215)
離婚する親への否定的イメージ	.46 *** (211)	.42 *** (217)	.21 ** (216)	-.19 ** (217)
離婚に対する否定的評価	.57 *** (213)	.39 *** (218)	.17 * (217)	-.31 *** (217)
離婚に対する好意的評価	-.05 (207)	.03 (212)	.26 *** (211)	.20 ** (212)
離婚家庭に対する同情	.27 *** (212)	.30 *** (218)	.20 ** (217)	-.10 (217)
離婚による人間的成長	.12 (213)	.07 (218)	.02 (217)	.03 (218)

注:()内はNを表す。*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

図表 2.29 離婚と離婚家庭に対する偏見意識と結婚に対する意識との相関(女性)

	伝統的結婚観	結婚のメリット	結婚による拘束感	個人志向型結婚観
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	.22 *** (259)	.21 *** (263)	.15 * (268)	-.14 * (263)
離婚する親への否定的イメージ	.52 *** (259)	.27 *** (263)	.14 * (266)	-.11 (262)
離婚に対する否定的評価	.32 *** (258)	.18 ** (260)	.04 (263)	-.13 * (259)
離婚に対する好意的評価	-.15 * (259)	.02 (262)	.08 (265)	.18 ** (262)
離婚家庭に対する同情	.08 (261)	.10 (264)	.27 *** (267)	-.05 (264)
離婚による人間的成長	.12 (260)	.27 *** (264)	.15 * (267)	.09 (263)

注: ()内はNを表す。*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

図表 2.28 と図表 2.29 より、男女とも、『伝統的結婚観』と『結婚のメリット』とは、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』のそれぞれと、正に相関していた。また、『結婚による拘束感』は、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』と『離婚する親への否定的イメージ』と正に相関していた。『結婚による拘束感』と『離婚家庭に対する同情』とは正に相関していた。一方、『個人志向型結婚観』は、『離婚に対する否定的評価』と負に相関し、『離婚に対する好意的評価』と正に相関していた。

次に、男女別にみると、男性では、『伝統的結婚観』と『結婚のメリット』とが、『離婚家庭に対する同情』と、『結婚による拘束感』が『離婚に対する否定的評価』、『離婚に対する好意的評価』とそれぞれ正に相関していた。また『個人志向型結婚』は、『離婚する親への否定的イメージ』と負に相関していた。一方、女性では、『伝統的結婚観』が『離婚に対する好意的評価』と負に、『結婚のメリット』が『離婚による人間的成長』と正に、それぞれ相関していた。また『個人志向型結婚観』は、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』と負に相関していた。

以上の結果より、男女とも、社会的信用や安らぎなど、結婚で得られるメリットを認識しており、また、これらのメリットが得られる結婚を当然と考えている個人ほど、離婚に対して否定的な評価を持ち、離婚をする親に性格的問題があり、責任感がないと感じていた。また、離婚家庭で育つ子どもは問題行動を起こしやすいと考えていた。一方、結婚を人生の選択肢のひとつとして捉え、結婚後も自分の目標を持つことが必要であるといった個人志向型の結婚観を持っている個人は、離婚を否定的に捉えることはなく、離婚を人生の再出発であるといったように、好意的に捉えていた。

次に、男女別みると、男性では、結婚によるメリットを感じ、結婚を当然と考えているほど、その結婚が崩壊した家庭に対して同情を感じていた。また、結婚による拘束感を感じている男性は、離婚をひとつの選択肢としてとらえ、人生の再出発となると考えていた。また結婚による拘束感を感じている男性は他方では、離婚は恥ずかしいこと、社会的信用を失うといったように、離婚に対して否定的な評価も有していた。女性では、結婚を当然と考えているほど、離婚を人生の再出発といったように好意的にとらえていなかった。ま

トを感じている女性ほど、離婚によっても、人間的に成長し、子どもも自立するなどのプラスの側面を得られると考えていた。また、今の世の中では結婚しなくても生きていけるといった個人志向型結婚観を持っているほど、男性では、離婚する親に性格的な問題がある、無責任であると考えることがなく、女性では、親の離婚によって、子どもに問題行動が生じるとは考えていなかった。

第Ⅱ部 離婚と結婚に対する意識調査(成人調査) 要約

【離婚に対する意識】

1. 離婚によって人間的に成長するなど、離婚がもつプラスの側面も認識されており、一般論として離婚に対して許容的な態度が持たれていた。しかし、離婚にはさまざまな苦勞が伴うと考えられ、自分自身が離婚することに対しては忌避感もたれていた。また、半数の回答者は、離婚する人は、性格に問題がある、責任感がない、結婚を安易に決めている、と離婚する親に対するステレオタイプを持っていた。離婚によって子どもが非行化するとは考えられていないが、子どもには両親が必要であり、離婚によって子どもにかかるストレスが懸念されていた。
2. 男性は女性に比べると、離婚に対する忌避感や抵抗感が強く、離婚する親は性格的な問題がある、無責任であると考えていた。また、離婚家庭の子どもは、非行化しやすいと捉えていた。女性は男性に比べると、離婚は人生の再出発である、離婚によって人間的に成長するなど、離婚に対して許容的な態度を持っていた。また、離婚家庭の子どもは親思いである、自立していると捉えていた。

【結婚に対する意識】

1. 結婚しないという生き方も選択肢のひとつであるにとらえられ、結婚が一人前の男性や女性としてのみなされるための条件であるという考えは否定されていた。しかし、半数は、結婚をすることを自明のことにとらえ、子どもを持つことが当然のことという保守的な結婚観を持っていた。また、結婚によって、安らぎや人間的成長、社会的信用が得られると考えられていた。同時に、金銭や時間、自分の個性なども犠牲にされるとも考えられており、結婚生活には我慢が必要であると考えられていた。
2. 男性は女性に比べて、結婚に対して保守的な結婚観を持ち、結婚したのであれば、子どもを持ち、配偶者と最後まで添い遂げるべきであると考えていた。また、結婚によるメリットを認識すると同時に、結婚によって、自分の個性や生き方、金銭などを犠牲するのは当然であると捉えていた。

【離婚・結婚に対する意識の下位側面】

1. 『離婚家庭の否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚に対する好意的評価』、『離婚家庭に対する同情』、『離婚による人間的成長』の6側面から構成されていた。男性は女性に比べて、離婚や離婚する親、その子どもに対して否定的な評価を持っており、女性は男性に比べて、離婚を好意的に捉え、離婚によって人間的に成長すると考えていた。
2. 『伝統的結婚観』、『結婚のメリット』、『結婚による拘束感』、『個人志向型結婚観』の4側面から構成されていた。男性は女性に比べて、結婚によるメリットを感じ、結婚を当然と考えていると同時に、拘束感も感じていた。また、60代は結婚を当然とする